琉球政府文書の保存状態調査について

1998年3月 大湾 ゆかり

はじめに

戦後27年間にわたり、米国の統治下で沖縄の諸行政機関が作成した公文書を総称して「琉球政府文書」、略して「琉政文書」と呼んでいる。琉政文書は、当時の沖縄がおかれた特異な歴史を語る非常に重要な資料である。これらは琉球政府の閉庁とともに沖縄県に引き継がれ、文書学事課から沖縄史料編集所、後に県立図書館史料編集室に所管替えされていく中で、民間の業者委託により17年余の歳月をかけて整理された。そして、灰燼の中から宝物をたぐるような根気と忍耐のいる作業が終わった後、結果として救われた約15万冊の文書群が、1972年閉庁時の琉球政府の組織別分類に即して同一規格の保存箱に収納され、同時に簿冊名までの目録が整備されて沖縄県公文書館(以下、「公文書館」と称す)に引き渡された。県に引き継がれて実に23年がたった1995年5月のことである。

このような遍歴の末に公文書館に引き継がれた琉政文書は、これから先さらに長い年月にわたって保存されることになる。しかも今度はただ保存するだけでなく、より良好な状態でできる限り多くの機会に活用されていかなければならない。そこで、公文書館では琉政文書の体系的保全を目標にした長期的保存プログラムを念頭におき、その試みの第一段階として現時点における琉政文書の保存状態調査を実施した。この調査は保存プログラムの指標となるデータを作成するためのもので、内容は当面着手すべき事項を優先してサンプリング調査を行い、統計学的根拠に基づいてデータを処理して全体の保存状態を推察したものである。

公文書館における琉政文書

公文書館における琉政文書の受け入れは、開館前の第一陣より現在まで続いている。開館当初14万7千余であった簿冊数は、その後徐々に引き継がれたものを合わせ調査時の平成9年1月末日には155,017簿冊に達している。これらのうち、開館前に受け入れた分は、直ちに保存箱ごと館内の専用書庫に搬入して燻蒸し、その後で資料の登録番号となる箱と簿冊のバーコードを貼付した。次に、整理の際に作成された簿冊目録を館内の検索システムへデータ変換し、資料タイトルや引継局課、作成年代等での簿冊検索を可能にした。そして、開館日の翌日の1995年8月2日より、琉政文書は一般に公開利用されるようになった。

大よそ簿冊状で存在する琉政文書は、現在、縦30cm横40cm高さ30cm規格のダンボール箱の中に縦置きに収納され、組織別分類に基いて決められた書架に整然と配架されている。後から受け入れた未整理分は、整理の段階で弱アルカリボード紙製のフォルダーに簿冊の厚みにあわせて収納され、これを中性ライナー紙製の新たな保存箱に並置して書庫に収めている。書庫内は空調によって温度20℃前後、湿度60%前後に終日管理され、定期的な清掃や書庫燻蒸で極力劣化を防げるように環境整備がなされている。

とはいえ、概して琉政文書には劣化したものが非常に多く、また形状や材質も様々である。とくに戦後の 物不足の中で生まれた資料とあって使われている紙の素材は劣悪で、酸化による紙繊維の崩壊なども著しい。 大半の文書は、ボール紙製の表紙を取りつけ背部までくるんだ方法で綴られているが、その表紙の外れや背 の崩れ、また本紙には薄手の罫紙や大きさの違う藁半紙、米リーガルサイズのグラシン紙等、規格や素材の 異なる紙が混在し、それによって小口部分の破損や表紙・本紙の酸による変色等がおこっている。その上、 クリップ類の大量使用により金具が朽ちて錆び穴を開け、破れた箇所の補修に使われたセロハンテープによ る黄変色や、水性インク・スタンプの滲み、水ぬれ等によるシミ、虫食い、カビによる被害が進んでいる。

この他、琉政文書には青焼きコピーの図面類が数多く含まれている。こうした青焼き資料は褪色しやすく、 近い将来完全に消失してしまう恐れがあるので、代替資料の作成など何らかの策を講じなければならない。

このように一見しただけでも一筋縄ではいかないほどいろいろな劣化状態にある文書群だけに、その保存 や修復にあたってはかなり複雑な取扱いが要求されている。

琉政文書の保存状態調査について

劣化が懸念される琉政文書に対して何らかの措置を講じる際に適用できる方法として、「段階的保存措置 (phased preservation)」が考えられる。この方法は『全体的調査の上で資料の状態をデータ化し、処置 の優先順位を決定し、保存プログラムにのっとって段階的に保存措置を施していく』 もので、現在では多くの資料保存機関で採用されている。琉政文書はいわゆる近現代の資料らしく、量が膨大で様々な素材や形状が混在し、さらに酸性紙という保存に不適な書写材からなるという特徴をもっている。これらの資料を一つ一つ細かく吟味して処置を施していては、とても全ての資料を安全かつ効率的に遺すことはできない。よって、琉政文書の対処には長期的視野に立った保存プログラムを策定し、段階的に保存措置を施すことが寛容だと思われる。そうした試みの第一段階として、琉政文書の保存状態調査を実施したわけである。

今回の調査では、劣化状態を的確に判断して数値化できるよう外部の専門家を委託し、当館職員との協議の上で調査項目や調査するサンプル数、調査方法などを設定して行った。設定事項は、時間と人数の制約の範囲内で行える必要最小限のものであり、必ずしも十分とは言えないまでも現在とくに必要とされる事項は盛り込めたものと確信している。具体的な作業内容は、以下のとおりである。

- 1. 調査期間 平成9年1月27日(月)~1月31日(金)の5日間
- 2. 作業手順 1日目 簿冊の抽出(151簿冊)、予備調査、調査項目の設定、統計表の作成
 - 2日目 調査開始(120冊終了)、追加分簿冊の抽出(150冊)
 - 3日目 調査(計280冊終了)
 - 4日目 追加分簿冊の抽出(100冊)、調査(計401冊終了)
 - 5日目 サンプルの写真撮影、調査報告のまとめ、報告会の開催
- 3. 受託者名 (有キャット 木部徹氏
- 4. 調査対象
- (1)対象簿冊数 琉政文書 155,017簿冊
- (2)サンプル数 401簿冊(全体の0.26%)

誤差率を5%以内に留めるため、統計学的な根拠をもつ数である384簿冊^②以上を調査することにした。結果として401簿冊を調査した。

(3)抽出方法 無作為抽出を基本とした。但し、151簿冊については組織別及び作成年代別に均等な数値を割り出し、コンピューター上で無作為抽出した。残り250簿冊については、琉政文書庫内にて各部局別書架の2~4連目、上から4段目左の箱の1番目の簿冊を直接抽出した。

5. 調查項目

調査項目は初めに抽出した151簿冊の簡単なチェックを行った上で、受託者との協議により設定した。その際、琉政文書の履歴(引継前/引継後の保管状況)、簿冊の形態、サイズ(大きさ・厚み)、使用されている紙質、酸化の度合等を考慮し、全体を把握するのに適当な項目を検討した。その結果、大きさ、厚み、青焼き等の枚数、劣化状態(補修する度合により5段階にランク分け)の4項目にしぼり、調査方法も簡便な方法を採用することで総意を得た。以下、各項目の設定理由と調査方法について記すことにする。

(1)大きさ : 規格内(30×40×30cmの保存箱に折らずに入る)か、規格外(折らないと入らない)か 現在使用している保存箱に収まりきれない規格外の簿冊数を概算するものである。現状では、箱より大 きな簿冊も折り曲げるなどして箱に収納しているので、この点を改善する目的で設定した。調査方法は、 現在使っている保存箱に実際に収納してみて規格内か否かを判定した。

(2)厚み(枚数): 簿冊の厚み(mm)×8.8

簿冊の枚数及び琉政文書の総枚数を推量するものである。本調査に入る前にサンプル30簿冊の厚みと枚数を数えて1mmあたりの平均枚数を算出。その結果、平均8.8枚の用紙が使われている計算になり、これを各簿冊を実測した厚みに乗じて枚数を割り出した。

(3)青焼き等の枚数 : 簿冊全体に対する青焼きの占める%×全体の枚数×0.7

琉政文書全体に含まれる青焼きコピーの総枚数を推量するものである。青焼きコピーによる印刷物は最も早く情報の消失が予想されるので、代替資料の作成等を念頭に入れて設定。算定方法は、まず目測で簿冊中の青焼きの割合(%)を出し、それに(2)で出した簿冊の枚数を乗算し、さらに0.7を乗算した。0.7の乗算は、青焼き等に使われる紙が他の用紙に比べて3割程度厚いためである。

(4)劣化状態 : 簿冊数/比率(%)

琉政文書の中で劣化して利用するのに支障がある資料の簿冊数を概算するもので、処置に要する時間を 基準に、処置のいらないもの、簡易補修A・B、修復C・Dの計5段階にランク分けして調査した。但 し、この中にはクリップ類やセロハンテープによる二次的劣化は含まない。

- ・処置のいらないもの:表紙等が変色しても、十分中身の利用ができるもの
- ・簡易補修A(処置時間が1時間程度):元綴じの外れ、表紙の付け替え、表紙背外れの直し等
- ・簡易補修B(同3時間): Aランクのものが複合して起こり、処置に多少時間がかかるもの
- ・修 復C(同18時間):紙の損傷等がみられ、修復に3日程かかるもの
- ・修 復D(同30時間):紙の損傷等が著しく、修復に5日以上かかるもの

調査結果

以上の方法によって琉政文書401簿冊を調査した結果は次のとおりである。

サンプル		比率(%)	サンプル		比率(%)
総冊数	401	100.0	青焼き等枚数	9,676	9.2
規格外冊数	4	1.0	補修・修復不要冊数	331	82.5
総厚み(mm)	11,920	_	簡易補修A冊数	41	10.2
平均厚み/冊 (mm)	29.7	_	簡易補修B冊数	20	5.0
総枚数	104,896	-	修復C冊数	6	1.5
平均枚数/冊	262	-	修復D冊数	3	0.8

次に、この調査結果を琉政文書の対象総数155.017簿冊に照合すると、以下のようになった。

全 体		比率(%)	全 体		比率(%)
総冊数	155,017	100.0	青焼き等枚数	3,740,452	9.2
規格外冊数	1,546	1.0	補修・修復不要冊数	127,957	82.5
総厚み (km)	4.6	_	簡易補修A冊数	15,850	10.2
平均厚み/冊(mm)	29.7		簡易補修B冊数	7,732	5.0
総枚数	40,555,282	_	修復C冊数	2,319	1.5
平均枚数/冊	262	_	修復D冊数	1,160	0.8

すなわち、琉政文書全体では規格外簿冊が約1%、青焼き等の資料が約9%、劣化して何らかの補修措置を施す必要がある資料が17%余り含まれているという結果にいたったわけである。このうち補修を要する簿冊数については、この調査では金具やセロハンテープ類の貼付された資料は数えていないので、それを含めると数値が飛躍的に変化するものと考えられる。また、酸性紙による紙の内部崩壊も考えられるが、ほとんどの琉政文書にそのような紙が含まれているので今回は具体的に数値に取りあげなかった。

考察

今回の調査で琉政文書の保存状態を数値化したことで、次の段階にむけて検討材料が示された。例えば、 規格外の簿冊が約1,550冊あると予想できることから、平均的厚みの簿冊なら1箱あたり9冊収納できると 仮定して172箱分の規格外の箱を準備するか、規格外だけ別置して配架方法を工夫する。青焼きコピー等の 資料約374万枚については、それらの所在調査をふまえて代替資料の作成計画を練る。補修を要する資料に ついては、段階的保存処置を適用する、などである。さらに、簿冊の平均枚数が推定できたので、具体的に 処理する枚数を算出し、時間やコストを考慮に入れた保存プログラムの立案に着手したいと考えている。

ちなみに、受託者からの調査報告で修復や青焼き等のマイクロ化に要する予想時間が算定された。それによると、簡易補修・修復に要する時間は作業員 1 名が 1 日に 6 時間、年間220日作業するとして、簡易補修 Aが12.0年、同B17.6年、修復 C31.7年、同D26.4年かかり、合わせて87.7年の年月を要する。また、青焼きをマイクロ化する場合、同じく作業員 1 名が 1 日に 2 簿冊、約500枚を処理し、年間220日作業するとして、34年間かかる。さらに、このような簿冊を15万冊の中から調査、抽出するまでの時間について、今回のような最も簡便な方法をもとに計算したとしても8.6年かかるというのである。

このように、琉政文書の保存処置には大変な時間がかかる。そして、たとえ処置し始めても、現段階の分を終える100年の後に今は健康な別の資料がそのまま良好であるという保証もない。そうしたことでは、はたして全ての琉政文書を確実に後世に受け継ぐことが可能であろうか。それよりも全体の段階的処置を基本に据え、とくに劣化したものは利用頻度の高い順に処置を施す方が賢明ではなかろうか。

琉政文書の保存プログラムでは、先にふれた中性紙の箱-フォルダー形式での保存に加え、現在進めている件名取りの整理作業にタイアップして保存処置を行うこと、またすでに整理済みの資料については閲覧時に状態を点検し、利用頻度やマイクロ化を簿冊のフォルダー等に表記して優先順位をつける方法等、整理や閲覧業務と連携した効率的な方法を盛り込む予定である。琉政文書を子々孫々まで受け継ぎ活用できる状態で保存するため、より具体的な保存プログラムの策定にこれから取り組んでいきたい。



大きさの評価例。 左のように、二つ折りしないと保存箱に 収納できないものを、規格外とみなした。



劣化状態の評価例。 左の簿冊は、表紙の傷みはひどいが、実際には綴じも本紙もしっかりしており、 中身を利用するのに支障はない。よって、 処置しなくても良いレベルに判定。



修復 C に相当する資料。 紙の老けがみられ、紙力強化した後で綴じ 直す必要があり、修復に 3 日程度かかる。



修復Dに相当する資料。 表紙や綴りも危うい上、様々な規格の紙 が混在しているので、用紙の強化を含め て修復するのに4日間以上かかる。

追記

本稿の執筆にあたっては、調査を委託した恂キャットの木部徹氏より後日提出された調査報告書を参考にした。

引用&参考文献:

- 1)文書館用語集研究会編(1997)『文書館用語集』、大阪大学出版会:110頁「フェイズド・プリザベーション」引用
- 2) Drott,C.M. (1969) "RandomSampling: a Tool for Library Research," College & Research Libraries 安里嗣淳 (1995) 「琉球政府文書の整備」『史料編集室紀要』第20号、沖縄県立図書館史料編集室 渡口善明 (1989) 『語りかける沖縄の文書』、渡口貞子 金城功・大城将保・富永一也 (1996) 「特集・琉球政府文書」『アーカイブズ』第2号、沖縄県公文書館

(おおわん ゆかり:沖縄県文化振興会公文書館管理部修復士)